



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 北海道開拓者精神とキリスト教 : 坂本直寛における政治と宗教                                                    |
| Author(s)        | 白井, 暢明                                                                            |
| Citation         | 基督教学, 31, 23-26                                                                   |
| Issue Date       | 1996-07-22                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/46570">https://hdl.handle.net/2115/46570</a> |
| Type             | journal article                                                                   |
| File Information | 31_23-26.pdf                                                                      |



## 北海道開拓者精神とキリスト教

—— 坂本直寛における政治と宗教

白 井 暢 明

明治以降の北海道開拓移住団体を分類すると、伊達士族などの「移住士族集団」、北辺の防衛という国策から編成された「屯田兵」、その後の各地からの「農民団体」や「開拓結社団体」、諸々の「宗教的団体」などに分けられる。開拓移住は、総じて「経済的」現象であるが、一部には、「宗教的」動機を伴ったものも存在する。キリスト教関係では、「赤心社」（明治十四年、浦河）、「インマヌエル」（二十四年、瀬棚郡利別村）、「聖園農場」（二十六年、浦臼）、そして「北光社」（三十年、クンネップ）などがある。

ここでのテーマは、「北光社」の創立者の一人である坂

本直寛について、特に彼の「北光社」設立及び北海道移住に関わる思想と行動について、「北海道開拓者精神史」におけるキリスト教信仰の役割という観点から光を当てることである。

坂本直寛は嘉永六年、坂本龍馬の甥として土佐に生まれた。立志学舎で学び、特にミル、ベンサム、スペンサーの英国自由主義思想に通渉した彼は立志社に入り、人民主権を盛り込んだ「日本憲法見込案」を起草するなど、当時屈指の進歩的・革新的自由民権思想家として活躍した。明治十八年、高知教会でナックスから受洗しキリスト教徒となり、そして明治二十年、三大事件建白運動に関連して保安条例により片岡健吉、武市安蔵などと共に投獄され、二十二年憲法発布の大赦によって出獄した。明治二十九年頃、片岡健吉らと合資会社「北光社」を設立して北海道拓殖事業を決意、三十年に最初の移住者と共にクンネップに移住した。北光社社長であった彼は、その三カ月後に何故か社長の地位を沢本楠弥にゆずり、いったん高知に帰った後、翌年家族とともに浦臼の聖園農場に移住した。三十五年、キリスト教系日刊新聞「北

辰日報」発刊に際して主筆に迎えられ札幌に移住し、夕張で発会した大日本労働至誠会の会長になるなど、政治的活動を再開したが、その直後植村正久牧師の強い勧めで日本基督教会旭川講義所の伝道師として赴任した。その後ピアソン夫妻とともに軍隊伝道、十勝の監獄伝道、廃娼運動に挺身した。

本発表の資料となるのは、彼の北光社設立及び移住前後の時期に成立した二つの文書、即ち、『海外移民論』（明治二十八年）及び『北海道の発達』（同三十年）である。ここでは、この二つの資料の比較検討から、彼の北海道開拓に関する思想と動機について、特に政治的モチーフと宗教的モチーフの関連という視点から私見の一端を述べる。

『海外移民論』は、榎本武揚などによるメキシコ移民組合の企画に賛同して書かれたものであるが、彼は早くから拓殖事業の計画を持っていた。そのきっかけは獄中で聖書を読んだことである。『自伝』によると、或る日申命記八章を読んで大いに神の恩寵を受け、モーゼにへブライ国民建設の偉業を為さしめた神の事跡に倣って、将来

或る事業を試みようとの希望を抱いた。それがメキシコ植民の企画への参加決意につながる。この原稿が書かれた時点では、まだ北海道開拓移住の構想はなかったたので、これは彼の北海道移住構想の前歴として重要なものである。この原稿から読みとれる重要な点は次の三点である。

- (1) 「新天地への旅立ち」のイデー 獄中での聖書からの啓示が具体化されるのは、このメキシコ植民計画であつた。第四章で彼は殖民の世界史的意義を強調し、伝統や習俗から自由な新世界での新コミュニケーション建設は、社会政策、政治上の実験を可能にすると述べる。
- (2) ナシヨナリズム 第一―三章で彼は、日清戦争を義戦とし、その勝利をもたらしたのは天皇の稜威と軍隊の忠勇、国民の愛国心、そして神の摂理であるとする。そしてこの戦争を列強に伍する大和民族の世界的膨張、つまり海外移民を計る一大好機と位置づける。ここには明らかに旧約思想と結びついたナシヨナリズムが見られ、初期の「民権」思想から「国権」思想への変化が見られる。
- (3) 殖民地建設における宗教教育の意義の強調 第七章

で彼は、宗教の役割を殖民の倫理的徳性を喚起するところにあると捉え、その模範をアメリカ開拓に成功したピューリタニズム及び北海道浦臼の聖園農場に見ている。

さて、その間に日清戦争が終わり、日本を巡る国際情勢は緊迫し、特に領土拡張傾向の見られるロシアの動向に対する政治的関心が彼の「進路変更」を決定することになった。彼が北光社設立を決意し、そしてクンネツプの現地視察に出かける直前の明治二十九年八月、札幌農学校新渡戸稲造主宰の夏期講話会で行った講演の筆記録が『北海道の発達』である。

まず、この講演で注目されるのは、北海道開発当局者の拓殖方針に対する彼の批判、特に当時の「大土地所有」と「小作主義」の弊害への批判である。小作人を奴隸状態に置くこの方法では「北門の鎖鑰」（対ロシアへの戸締まり）の役割を果たせないと主張する。

更に彼は北海道殖民の現状に触れ、開拓当局の保護政策が道民の「依頼心」を強めたと主張し、更にヨーロッパ諸国の殖民地の例に習って、北海道の「北門の鎖鑰」

としての役割を果たすためには特に「自治独立の精神」が必要と説く。

そして最後に、殖民地と宗教との関係については、豪州や北米ペンシルベニアにおける基督教の偉大な力为例に、殖民地の「品格」が高まったのは、教会の力によってであり、「敬神の念」と「博愛」の精神を開拓移住の方針としたためであるとする。

このような彼の「自當農主義」や「コミュニテイ論」はまさに北光社を設立して北海道拓殖事業に乗り出そうとしていた坂本直寛氏の思想の核心を示すものとして重要である。北海道人の「依頼心」を強化した政府の保護主義、そこから出てくる「自治の精神」の欠如などを厳しく批判する彼の論は、いまだに残存する北海道人の「官依存」体質の根源をすぐに見抜いていたものとして、注目に値する。

さて、これらの資料を見る限り、武市安裁とは異なつて、彼の場合北海道開拓移住は政治的「挫折」や「失望」からの転向ではないこと、そして、そこには政治的モチーフと宗教的モチーフが終始併存または混在していること

がわかる。ところでそのどちらがメインなのか。また彼のコミュニティ論にみられる民権論的要素と「北門の鎖鑰」論にみられるナシヨナリズムⅡ国権論、そしてキリスト教的理念とがどのように結びついているのか。

坂本の思想における政治と宗教の関連を示唆するものとして、『自伝』の中で彼は次のように述べている、「従来、私が信奉してきた政治上の思想は、抽象的な自由主義、即ち厳しい個人主義であって、国家の興廃はいつにこの主義の消長にかかわると信じていた。それ故に、努めて急進的な進歩説を唱えていた。……しかし実は国家の興廃には、目に見えない、しかも偉大な「力」、つまり国民の品行如何がかかわっていた、そしてその力とは全能の神が私たちに与えて下さる聖火である」。彼は晩年に『福音新報』に発表した一連の論文でも、日露戦争を「義戦」とする根拠として繰り返し「神の摂理」を挙げている。ここには明らかに旧約的、預言者的思想が影響を与えている。

更に、武市安裁の場合には政治的世界そのものへの「幻滅」がかえって教会を中心とした「宗教的共同体」形成

力を高めたのに対して、北光社での教会建設やキリスト教による教育の努力はきわめて弱かった。北光社移住者の定着率が聖園農場に比較してかなり低かったことの決定的原因もここにある。更に、坂本は不可解にも入植後まもなくその地を去った。彼の本来の思想からして彼はまず真つ先に伝道所を作り、キリスト教精神、倫理の普及に努め、彼が説く「自治の精神」涵養のための教育実践に努めるべきであつた。実は彼の中で中途離脱の最大の理由が終生政治的活動への未練を捨て切れなかつたことにある。

そして一方、彼の政治思想、特に評価されるべき「自治独立」の思想もその徹底性に不満が残る。つまり、この「自治・独立」の精神の方向は、かつて彼が鋭く批判してきた中央の藩閥専制政府や、まさに当初から薩摩藩閥の牙城である北海道行政府に対して向けられることはなかつた。ここにも彼のナシヨナリズムが陰を落としているように思われる。